

ジェフリー・チョーサー作

短 詩 集

地村 彰之・笹本 長敬*訳

岡山理科大学教育学部中等教育学科

*大阪商業大学元教授

(2019年10月21日受付、2019年12月9日受理)

はじめに

チョーサーの小詩集でよく取り上げられる作品に「お抱え写字生アダムへチョーサーの苦言」がある。『ボエース』と『トロイラスとクリセイデ』のことが言及されていることから、この詩が 1380 年代後半に書かれたものと考えれば、代表作『カンタベリー物語』を執筆し始める頃の作品と言えそうである。この詩は『トロイラスとクリセイデ』や『カンタベリー物語』の一部の作品「女子修道院長の話」などで用いられている 7 行のライム・ロイヤル (ababbcc) という詩行で構成されている。

Adam scriveyn, if ever it thee bifalle
Boece or Troylus for to wryten newe,
Under thy long lokkes thou most have the scalle,
But after my making thow wryte more trewe;
So ofte adaye I mot thy werk renewe,
It to correcte and eke to rubbe scrape,
And al is thorough thy negligence and rape.

(写字生アダムよ、もしも、将来、『ボエース』や
『トロイルス』を新たに筆写することがあれば、
もっと忠実に私の原稿を筆写してくれなければ、
お前の長い髪の下に乾癬^{かんせん}がきつとできるだろう。
私は日に何回もお前のした仕事をやり直さなければならないのだ。
訂正したり擦ったり削りとったりしなければならないのだ。
すべてお前の怠慢と早合点によるのだよ。)

よく読んでみると、いつものことながら、どこまでが本気でどこまでが冗談であるのか、決めかねるところもある。しかし、『善女列伝』のプロローグを F 版から G 版に改訂したように、チョーサーは日頃から自分の書いたものを何度も推敲していたことから推察すると、写字生アダムへの苦言は真実に近いものであったかもしれない。注釈にも書き加えたが、近年そのアダムの実像が浮かび上がったことは、チョーサーとアダムとの関係が実際に存在していたことを証明しているとも言える。

今回は、このようなチョーサーの小詩を日本語に翻訳したものを掲載する。ただし、紙数の制限もあり、笹本長敬訳『チョーサー 初期夢物語詩と教訓詩』(1998 年)と重複したものは一部割愛している。

エー・ビー・シー

ココニ アルファベットノ歌 始マル

A

Almighty

全能にしてあまねく慈悲深い女王様、
世の人びとは、罪、悲しみ、そして心配事から
解放されようと、^{あなた}貴女に救いを求めて駆け寄ります。
花の中の花^{*}たる、栄光の処女よ、
罪に苦しむ私は、貴女の許に駆け寄ります。
強く優しいお方、お助け、お救い下さい、
私の心もとない弱さに、お慈悲を垂れ給え。
むごい敵が私を打ち負かしました。

B

Bountee

慈しみが貴女の御心に、テント^{*}を据えておられます、
貴女は私の救いであることを、よく分かっておられます。
貴女は神妙な心がけをお持ちゆえ、助けを求める人びとを
拒絶するはずがございません、御心はいつも寛やかですから。
貴女は完徳の賦与者であられます、
避難の港、安静の港、そして休息の港であられます。
ほら、七大罪源が私を追いかけてくる様をござん下さい。
お助け下さい、聖母様、私の船がばらばらにならないうちに。

C

Comfort

慰めは貴女にしか見出せません、麗しい聖母様、
ほら、私の罪と罰は、
貴女の御前に現れるはずはございませんが、
厳しい正義に基づいた重大な告発であって、絶望に至る
つらい告発を私にしたのです。至福の天上の女王様、
法的正義のもとに、貴女のお慈悲がなければ、
私は永罰に値するのが正当だと
それらは主張するかもしれません。

D

Dowte

疑いの余地がありません、赦免の女王様、
貴女がこの世の恩寵と慈悲の源であるということは、
神は貴女を通してわれらと和解して下さいました。
確かに、キリストの至福の母上様、
もし、今、正義と怒りの弓が
キリスト托身以前のように引かれたならば、
公正な神はどんな慈悲も聞く耳を持たれないでしょうが、
貴女によってわれらは望むままに恩寵が得られます。

E

Evere

常に貴女には私の避難所という希望がありました、
これまでいろいろな点において
貴女は私をよく慈しんで下さいましたから。
しかし聖母様、どうか哀れみを垂れ給え、われらが

高潔な審判者の面前に至る、最後の審判の日に。
それから私の中でほとんど果実は見つかりませんので、
貴女がその日^{*}の前に^{悪徳}を正して下さいなければ、私は
厳しい正義によって自分の所業により滅ぼされるでしょう。

F

Fleeinge

駆けて、救いを求めて貴女のテントへ逃れます、
恐ろしい嵐から身を隠すために。

たとえ私が^{よこしま}邪^{*}であっても、私から身を引かないように
お願いします。ああ、それでもこの危急に際してお助けを。
私は意志と行為において動物のようでありましたが、
聖母様、貴女の恩寵で私を覆って下さい。
貴女の敵と私の敵は——聖母様、注目して下さい——
いままさに私を死に追いやりようとしております！

G

Gloriousmayde

栄えある処女にして母上様、地上においても、
海上においても、決して厳しくあられたことはなく、
常に甘く慈悲深くあられました。
わが父なる神が私にお怒りにならないようお執り成し下さい。
お伝え下さい、私は父を拝する勇氣がありませんから。
ああ悲しいかな、私はこの地でそう振舞いましたので、
貴女が私の救いでなければ、きっと、
父は私の靈魂を永劫の悪臭場所へと追放なさるでしょう。

H

He

神は、思召しのとおり、人となられ、
われらと縁組されることに、みずから、同意され、
篤く信仰するすべての改悛者に対して
十字架上に完全な無罪放免と、
貴い血で文書を書かれました。
それゆえ、聡明な聖母様 われらのためにお祈り下さい。
それから、貴女は神の悲しみも鎮め、
われらの敵サタンからその餌食もお救い出されるべきです。

I

I

私は存じています、われらの救い手であられようと、
もちろん、貴女は恵みに満ち溢れておられます、
魂が過ちを犯すと、
貴女に哀れみの情が出て、魂を再び引き戻しますから。
それから、貴女は主と和解させ
魂をねじれた不正の道から連れ出します。
どなたが貴女を愛しようと、その愛は無駄ではありません、
その人がこの世を去る時それが分かるでしょう。

K

Kalenderes

教会暦に、この世で貴女の御名をうけて
光り輝く人たちは、彩色文字ではっきり記されています、
そしてどなたが直^{ちよくどう}道をたどり貴女の許に赴こうとも、
魂を損なうことを恐れる必要はありません。
さあ、慰めの女王様、貴女は私が薬を懇願するお方、
まさにそのお方ですから、

敵にもうこれ以上私の傷口を広げさせないで下さい。

私の健康を貴女の御手にすべて委ねますから。 80

L

Ladi

聖母様、十字架の許での貴女の悲しみも、
御子の悲惨な苦しみも、語り描くことができません。
しかし貴女の両方の苦痛にかけてお願いします、
われらみんなの敵*に、貴女がたお二人*が
高価に贖われたもの*（魂）を、俺が俺の矢来*で気の毒だが
打ち負かしてやった*と、自慢させませんように。 85
最初に申し上げましたように、貴女はわれらの存在の礎、
慈悲深い清らかな眼をわれらに投げ続けたまえ。

M

Moises

モーセは、叢林が赤い炎に包まれて燃えていたが、
そのうちの一本の小枝に全然燃え移らないのを見て、 90
それを貴女の汚れない処女性の印であると解されました。
貴女は精霊が降り立つ叢林であります、
モーセが火に包まれていると思った叢林であり、
これは象徴でした、
さあ、聖母様、地獄で永劫に燃え続ける 95
火からわれらをお守り下さい。

N

Noble princesse

高貴な女王様、すぐれて比類なきお方、
もしわれらに慰めがあるとすれば、きっと、
キリストの最愛の母上様、それは貴女より来たるもの。
われらには逆境の中にあってわれらを喜ばせてくれる 100
楽曲も音楽もありません、
われらのためにあえて祈ってくださる守護者もおりません。
しかも一度か二度アヴェマリアの祈りを捧げるために
お手伝い下さる貴女のようなお方もほとんどおりません。

O

ああ、盲人の眼に対する真の光よ、 105
ああ、労苦と辛苦に対する真の喜びよ、
ああ、人類に対する恵みを保管なさるお方よ、
慎みゆえに神は貴女を母上にお選びになられました！
神は神の侍女から天と地の女主人になされました、
われらの懇願を奏上するために。 110
この世の人は貴女の善を常に待望しております
貴女は困窮する人を決してお見捨てにならないから。

P

Purpos

意図があります、私にはいつかお尋ねする意図があります、
貴女のお耳にガブリエル*の声が届きました時、
精霊が何のために何ゆえに貴女を求められたのかを。 115
神はわれらと戦うためにそのような奇跡をなされたのではなく、
その後、贖ったわれらを救うためにそれをなされたのです。
その時われらが必要とするのは自分を守るための武器ではなく、
当然のことですが われらが改悛しなかった処でのみ必要で、
しかも慈悲を求め、受けることだけです。 120

Q

Queen

女王様、慰めの女王様、私は神にも貴女にも両方に
罪を犯したと自ら思い、
しかもわが魂は地獄に落ちるに値すると思うと、
ああ、臆病者たる私は、どこへ逃れられましょうか。
どなたが貴女の御子への仲介者になって下さるでしょうか。
慈悲の泉であられる貴女ご自身以外、どなたでしょうか。 126
われらの艱難に際してこの世においてどなたが口に出して
おっしゃるよりも、貴女は多くの同情をお示し下さいます。

R

Redresse

矯正して下さい、私を、母上様、私を懲らしめて下さい、
きっと私は父の懲らしめに 130
少しも耐えられないでしょう、
父の公正な決済は大変厳しいですから。
母上様、貴女からわれらの慈悲が湧き起こりますので、
私の判事になって下さい、私の魂の医者にもなって下さい。
貴女に憐憫を懇願するいずれの人にも 135
貴女にはいつも憐憫が豊富にお与えしますから。

S

South

真実を申しますと神は貴女なしには憐憫を
お授けにならないのです。善なる神は
御意にかなわなければ、どなたもお許しになりませんから。
神は貴女をこの世の代理人兼女主人になさり、 140
天の女支配者にもなさいました。
神は貴女のご意志にしたがって
正義を抑制なさいます。それゆえその印として
神は王らしく堂々と貴女に冠を授けられました。

T

Temple

寺、敬虔な寺院、そこは神が住まわれるところ、 145
信心のない者たちは拒まれるところ、
貴女の許へ私の悔い改めた魂をお持ちします。
私を受け入れて下さい、私はもう逃れられません。
ああ天の女王様、有毒の茨で、
大地はずっと以前から呪われていましたから、 150
よくお分かりのように、私は深く傷つきましたので、
もう死にそうです、ひどくずきずき痛みますから。

V

Virgine

聖処女よ、貴女はまことに気高く振舞われ、
天国の高い塔へとわれらを導かれます、
私に教えて下さい、助言して下さい、 155
どうすれば貴女の恩寵が得られ、貴女に救われるかを。
私はことごとく汚れ、間違っております。
聖母様、私をあの法廷に御召喚下さい。
おお、新鮮な花よ！貴女のベンチと呼ばれる法廷に、
慈悲がいっまでも居残るところに。 160

X

Xristus

キリストたる、貴女の御子は、十字架上で受難を

受けるためにこの世に降りられました、
そしてまたロンギウス*が御子の心臓を貫き、
心臓の御血を流れ落としました。
これはすべて私を救うためでしたが、
私は御子に対し不実で思いやりがありませんでした。
でも御子は私に永罰を望まれませんでした。
人類の救い主たる、貴女にこれ感謝いたします。

Y

Y s a a c

イサク*はキリストの受難の典型でした。
彼は父親に殺されることを全く厭わなかったほど、
父親に従順でした。

丁度そのように御子も子羊の如く身罷ることを好まれました。
さあ、慈悲あふれる聖母様、お願いです、
御子は慈悲をまことに心広く分け与えられましたので、
貴女も惜しみなくお与え下さい、われらはみな、
貴女はいつも懲罰を守る盾であられると詠唱しますから。

Z

Z a c h a r i e

ザカリア*は、貴女を、その罪から
罪深い魂を洗い清める開かれた泉*と呼んでいます。*
それゆえ次の教訓を私はよく悟るべきであると思います、
貴女の優しい御心がなければ、われらは救われないことを。
さあ、聡明な聖母様、アダムの子孫*に対し
情け深くあれ、これからもうであられましょうから
哀れみをかけるに値する改悛者たちのために
お建てになられたあの宮へわれらをお連れ下さい、アーメン。

ココニ 歌 終ワル

〈憐憫〉への哀訴

〈憐憫〉よ、私は心の病と渴望する胸の痛みに
苛まれながらこんなにも長くあなたを捜し求めました。
——この世にこれほど悲しむ人がいれば
必ずやこの世からいなくなるものですが——実を言えば、
捜し求めた目的は、〈愛の神〉の残酷と暴虐について
〈憐憫〉に哀訴することでした、〈愛の神〉は
私が誠であるがゆえに私を亡き者にするからです。

私はずっと以前から、
お話しする機会を絶えず求めていました。
その時が来て、涙にかき暮れながら〈憐憫〉の許に走りました、
〈残酷〉の敵を討ってくれることを願うために。
しかし私は、どんな言葉も発することができず、
ひどい苦しみについて一言も言い出せないうちに、
〈憐憫〉は亡くなり、心の中に葬られるのを知りました。

棺上の蠟燭立ての杵*を見ると、私は倒れました、
卒倒が続いている間、石のように息が途絶えました。
しかし私は蒼白になって立ち上がり、
悲嘆に暮れて〈憐憫〉に眼を向けるや、
その亡骸に馳せ参じ、
せっせとその御霊のために祈りました。
私は死んだも同然、ただそれだけでした。

こうして私は死にました、〈憐憫〉が亡くなったから。
ああ、その日よ、それは必ずや起こる。
誰が今恐れずに毅然としていられようか。
誰に悲しい心を打ち明けようか。
今〈残酷〉はわれらみんなを殺そうと謀っている、
苦痛を癒やすことなく、むなしい希望を抱く人びとを。*
〈憐憫〉が亡くなったから、われらは誰に哀訴しようか。

しかし、この新しい驚きはなおも私に弥増している、
〈憐憫〉が死んだことを私以外誰も知らなかったという驚き、
随分多くの人たちはその盛時には〈憐憫〉を知っていたのに。
〈憐憫〉が亡くなったのはそれほど急ではなかった。
私は初めて分別もしくは人知を得て以来、
ずっと〈憐憫〉を熱心に捜し求めたから。
しかし、〈憐憫〉は私が見つけ出す前に死んでしまった。

〈憐憫〉の棺上の蠟燭立ての杵の周りには、幸せそうに、
私にはそう思えるのだが、どんな悲しみもなく、
十二分にしかも豪華に武装した完全な〈恵み〉が、
新鮮な〈美〉が、〈欲望〉が、〈歓喜〉が、
〈自信に満ちた態度〉が、〈青春〉が、〈名誉〉が、
〈知恵〉が、〈高位〉が、〈恐怖〉が、そして〈自制〉が
絆と血縁の両方を結んで立っていた。

私は哀訴を、〈憐憫〉に手紙として
差し出すために、自分の手で認めていた。
しかし、私に助けの手を差し伸べてくれるよりも
むしろ私の言い訳をすべて壊したがるこの仲間たちを
そこに見つけた時、この哀訴の手紙をそっと握り締めた。
間違いなく、あの人びとには、
〈憐憫〉がいなければどんな訴状も反古となるから。

それから私は〈憐憫〉を除くすべての徳たちから、立ち去った。
あなたがたは私が語るのを聞いたこの遺体を見守りながら、
〈残酷〉の結集力によってことごとく手を結び、
私を殺すことに同意したこれらの徳たちから、立ち去った。
私は再び哀訴の手紙をしまいこんだ。
敵にこの手紙をあえて見せたくないから。
その内容はこうである、言葉数少なに認めてある。

哀訴*の嘆願状

この上ない謙譲心の人、最高の尊敬に値する人、
恵み深き花、あらゆる徳の女王よ、
女王閣下に、貴女しもべの僕は、私自身あえて
そう呼ばせていただけるなら [そう呼びますが]*
私が身に生じた致命傷をお見せいたします。
自分の不運な窮状のためだけでなく、
貴女のよき評判のためにも。

文面はこうです。貴女の敵たる〈残酷〉は、
貴女の王権に逆らった
女性の〈美〉に変装して——
ほら、そのため、その暴虐ぶりは周知されるはずがない——
〈寛容〉や、〈高貴〉、〈懇懇〉と同盟を結び、
いま貴女から「〈美〉は〈優しさ〉とお似合い」と呼ばれる
地位を奪い取りました。

貴女は真正の生得権により、生まれながらに
〈寛容〉とずっと手を結んでいるので、
まさに、貴女は力を尽くして
逆境にある〈誠〉を助けるのが当然の義務なのです。
貴女は〈美〉の女王でもあります、
もちろん、これら二つを欠くならば*、
この世は失われます。申し上げるのは以上です。

恵み深き人たる貴女がいなければ
〈礼儀〉と〈高貴〉もどんな役に立つのでしょうか。
〈残酷〉は貴女の女支配者でしょうか。
ああ、どんな心がそれに長く耐えられましょうか。
それゆえ、貴女がなるだけ早く
あの危険な同盟を破る苦心をなさらなければ、
貴女に忠実に従う人たちを見殺しにしてしまいます。

その上、もし貴女がこれを耐えて受けるならば、
貴女の評判はたちまち消えてしまいますので、
〈憐憫〉とは何者であるか誰もよく分からなくなるでしょう。
ああ、貴女の評判はなんと低く落ちてしまうことでしょう。
貴女の地位を占拠する〈残酷〉により、
貴女は生得権を奪われるでしょう。そうすれば
われらは貴女の恵みを求めることを絶望させられます。

〈復讐の女神たち〉の女王*よ、私に哀れみを垂れ給え、
私は非常に愛情をこめて、しかも長いこと貴女を求めました。
時が経つにつれてますます貴女を愛し恐れる私に
貴女の光明の流れを見せて下さい。
実を言うと、私は痛みを耐えております。

たとえ私が哀訴の文に熟達していなくとも、
後生ですから私の苦痛を哀れんで下さい。

私の苦痛はこうなのです、私が何を望んでも、
それを持てず、それに近いものも持てないので、
ずっと〈欲望〉が私の心に火を焚き付けています。
他方、私がどこへ行こうとも、
私の悲しみがいやま増すたぐ類いのものは何であれ、
いつも私の身近にあり、どこにでもあります。*
今私に欠いているのは、死とそれから私の棺だけです。

私の苦痛の要部をどうして示す必要がありますでしょうか。
私は心で感じられるかぎりの悲しみを受けていますが、
貴女にあえて訴えるつもりはありません。
私にはよく分かっております、私が眠ろうが目覚めようが、
浮こうかと沈もうが、貴女は気になさらないということを。
それにもかかわらず、私は死ぬまで誠を持ち続けます、
そうすれば、やがてそれをよくお分かりいただけるでしょう。

すなわち、私はずっと貴女のものになりましょう、
たとえ貴女の敵〈残酷〉によって殺されようとも。
とにかく私の靈魂は、どんな苦痛や悲しみがあろうとも、
貴女にお仕えすることを決して止めません。
でも、貴女が亡くなられて以来——ああ確かにそうなのだ——
こうして心の病と渴望する胸の痛みにさいなまれながら、
私が泣き嘆くのは貴女が逝去されたゆえに当然のことでしょう。

終ワル

かの君への哀訴

—

夜長、生きとし生けるものは
おおむね自然界に習って休まなければならない、
そうしなければ命が長く持たない時刻に、
私は悲痛な気持ちに陥る、
死ぬ以外に、救ってもらえないところまで、
なんとひどく落ち込むことか、
私は幸せをすべて失ってしまったのだ。

この思いは朝まで続く
それから朝から宵まで続く、
私には代わりとして苦悩を借用する必要などない、
なにしろ嘆く十分な時間も暇もあるのだから。
私には十分に泣いたり、思う存分嘆いたりする
悲しみそのものを取り除いてくれる人はいない。

今は苦痛という激しい火花が私を亡き者にしようとする。

二

〈愛の神〉は私をこのような立場に置いたので、
 15 [彼は] 私の欲望を決して満せないだろう。
 なにしろ哀れみも、情けも、恩恵も、
 私は見出せないから。だけど死ぬのが怖い
 ため
 悲嘆に暮れる心から愛を追ひ払えない。
 20 愛すれば愛するほど、かの君は私をひどく苦しめる。
 苦しみの中では治す術なく、
 私は死から少しも逃れられないことが分かる。

三

さてかの君は実のところ何と呼ばれているか挙げてみよう。

名は女性に備わる〈徳〉、
 若さにある〈ひたむき〉と謙遜な〈美しさ〉、
 25 そして抑制と気遣いする〈喜び〉、
 また〈冷たい美貌〉もかの君の姓、
 〈好運〉に結びついた〈才知〉も、
 だから、かの君を愛するがゆえに、彼女は私を殺しても無実。
 かの君を何よりも愛し、生きている間、愛しよう、
 30 自分自身より一万倍も、
 この世のすべての富や生き物よりも。
 さて〈愛の神〉は、私には関係ない領分として
 愛する術を私に十分授けてくれなかったのか。
 34 ああ、まさにこうして運命の女神の車輪は私のために回る、
 こうして〈愛の神〉の火矢に殺されるのだ！
 私は何よりもかの君を、わが甘美な敵*を愛するだけ、
 〈愛の神〉は愛の術を二度と教えてくれなかったが、
 教わったのは常に奉仕することと悲しみを止めないことだけ。

四

私の本当の〔しかも〕悲嘆の心の中には
 40 悲しみが多くありすぎ、〔また〕喜びは少なすぎる、
 だから生まれたことがつらい。
 なにしろ私には望むものはすべて欠けていて、
 望まないものはすべて、間違いなく、
 いつでも私の手元に見つかるようになっているから。 *
 45 これを誰に訴えてよいかわからない。
 なにしろ私をこの現状から連れ出せるかの君は
 私が泣こうが歌おうが気にしないのだから、
 私の苦しみについてほとんど共感してくれないのだ。
 ああ！ 眠るべき時に私は眠れず、
 50

ほら、乱舞すべき時に怖くて震える。
 ほら、この重く切ない人生を私は送った、貴女のために、
 だがそれに対して貴女は少しも気遣ってくれなかった、
 心底愛する君よ、私の生涯の女王よ、
 15 本当に私が感じていることをあえて申し上げます、 55
 貴女の鉄のようなお心は私に対して
 今は鋭く研ぎすまされすぎているようです。

私の愛しい人であり私の最愛の敵よ、
 20 なぜ貴女は私にこのような悲しい思いをさせるのですか。 59
 私は貴女に悲しませることをしたり申し上げたりしましたか。
 私は奉仕するためや愛するため以外なにもしていませんのに。
 生きている間はずっとそうしますよ、
 だから、愛する人よ、不愉快な思いをさせないで下さい。
 貴女はまことに善良でありまことに美しいから、
 善悪両方のありとあらゆる僕たち*がいなければ 65
 それは大変不思議なことでしょう。
 だがそのうちでいちばん値打ちのない人、それは私なのです。

しかしながら、私の真の愛しの君よ、
 でき得る限り、常に妃殿下にお仕えするには、
 私は不器用で、不相応でありましょうが、
 70 誓って申し上げます、貴女を喜ばせることに、
 私ほど熱心な者はおりません。貴女の苦しみを
 治して差し上げる者は、私以外にこの世にはいません。
 私が意志ばかりでなく力も持っておりますなら、
 その時そうなのか否かがお感じになられるはずです。 75
 〔私ほど〕*貴女の心のお望みを喜んで果たそうと思う者は
 この世に生きておりませんから。

なにしろ私は貴女を大変愛し、またひどく恐れております、
 とにかくずっと長くそうであったし、そうあらねばなりません。
 誰よりも愛していますし、これからもそうでしょうから。 80
 でも私はこれだけを懇願したいと思います、
 私を信じて下さい、だから怒らないで下さい、
 そして仕え続けさせて下さい。ああ、これだけでございます。
 私は貴女に愛されようと望むほど
 大胆でもなく無分別でもありませんから。 85
 ああ——私は、それはあり得ないとよく分かっておりますから、
 私はそれほど取るに足りず、貴女はそれほど立派なのです。

貴女は生きとし生ける者のうち最も優れたお方、
 私は幸運に最も恵まれそうにない男、
 90 にもかかわらず、私はよく存じています、
 貴女は私に貴女への奉仕をお払い箱になさらないことを、
 私はいかに悲しく感じようとも、五感を駆使して、
 本当にいつも貴女に奉仕せねばならぬことを。
 私は実に見事に貴女にとらわれた身、

たとえ憐れみをかけて下さらなくとも、
私は貴女を愛さねばなりません、【ここに】
生きておられるどの人よりもずっと真実ですから。

95

しかし、立派な気高い君よ、貴女を愛すれば愛するほど、
貴女は私を愛してくれないことが分かります。
ああ、その冷酷な心根はいつ改まるのでしょうか。 100
貴女の女性らしい哀れみと貴女の高貴な性質、
貴女の優しさは今どこにあるのでしょうか。
貴女はそれらを私に使い尽して下さらないのですか。
愛しの人よ、これほど完全に私はすべて貴女のものであるのに、
貴女に仕えるために、これほど大いなる意志を持っているのに、
さればこそ、きっと、もし私をこうして死なせても、
貴女はそれから得られるものはほんの少ししかないでしょう。

私の知る限りでは原因となることを何もしておりませんので、
次のことを貴女に心より懇願いたしたいと思ひます、
貴女が生きている間に、私よりも 110
忠実な ^{しもべ} 僕 を、見つけなさるなら、
その時は私を見捨ててためらうことなく打ち殺して下さい。
私の死を貴女に差し出すことをお許し下さい。
もし私より忠実な僕が本当に見つかられなければ、
わが身がこうして滅ぶことをお許しなさるのでしょうか、 115
お許しなさるのは、善意以外のどんな罪でしょうか。
その時不実は誠実と同じように善いことになりましょう。

しかし私は、わが生死を、貴女のご意志に委ねます。
そして私は従順な真心をもってお祈りします、
貴女は最も楽しいように、私のそばでなさって下さいと。 120
どんな時にも貴女を不愉快にさせる事を
申し上げるか、考えるかよりも
むしろ貴女を楽しませるか私自身死ぬほうがましです。
だから、愛しい人よ、私のうずく苦痛に哀れみを垂れ給え、
そして貴女の恩寵の数滴を私に垂らしたまえ、 125
さもなければ私には幸せも希望も持続しません、
また私の不安な悩み疲れた心のままには居続けられません。

マルス（火星）*の恨み言

[序 歌]

鳥たちよ、喜びたまえ、^{しのめ} 東雲*を、
ほら、かなたの赤い光の帯の中を昇った、ウェヌス*を。
瑞々しい花々よ、この日を称えなさい、
太陽が昇れば、あなたたちは花開くのだから。
絶えず恐々としている恋人たちよ、 5
逃げなさい、悪舌持ちに見つからぬうちに。

ほら、向こうには太陽、嫉妬の燭光だよ！

悲涙*に、そして傷心に暇乞いしなさい、
あなたたちの保証人としての聖ヨハネ*にかけて
あなたたちの悲痛を幾分でも和らげなさい。 10
あなたたちの悲しみの止む時が再び必ずやって来る。
楽しい夜は重苦しい朝に匹敵する——
聖ヴァレンティン様、太陽が昇る前、一羽の鳥*が
あなたの聖なる日のために、こう歌うのを聞きました。

この鳥は歌いました——みんな目を覚ましなさい、 15
まだ連れ合いを選んでいないものは、
謙虚な態度で悔いることなく選びなさい、
私の忠告どおりに選び終えたものは、
せめて自分の務めを新たに始めるように、
自分の務めを永久に続ける決意を固めて、 20
辛抱強く自分の運を賭けなさい。

そしてこの尊い祝祭のために、
私はわが鳥*の流儀に従って、
ともかく、悲しむマルスが、
ある朝清新なウェヌスから 25
旅立つ時に、発した哀訴の趣旨を歌おう、
ポイボス（太陽）*が赤く燃える^{たいまつ}松明をかざして、
太陽を恐れるあらゆる恋人たちを探し出す朝に。

[物 語]

かつて上天の第三天の王*マルスは、
天の回^{いさおし}転^{くわん}運動*だけでなく、
勲功によって、ウェヌスの愛を勝ち取った。 30
一方ウェヌスはマルスを[愛の ^{しもべ} 僕 として]服従させ、*
女主人として彼に学ぶべきことを教えて、
自分に仕えている間、どの恋人にも
蔑むような大胆なことを決してすべきでないと命じた。 35

ウェヌスはマルスにどんな場合にも嫉妬を禁じ、
残忍と、驕りと、暴虐を禁じた。
望みのままにまことに慎ましくすなおにさせたので、
彼女が彼に目を注いでやると、
彼は生死を物ともせず、忍耐強く彼女の意志を受け入れた。 40
こうして彼女は自分の流儀に従って、
彼女の表情*という ^{しもと} 答 だけを用いて制御する。

今この上ない幸せのうちに君臨するのは、
この立派な騎士を支配下におくウェヌス以外にいない。
今歌うたうのは、喜びの贈与者たる美しく輝くウェヌスに 45
このように仕えるマルス以外にいない。

彼は永遠に従うことを約束し、
彼女は彼を永久に愛することを約束する、
彼の落ち度により愛を断ち切ることがなければの話だが。

かくして二人は結ばれ、じっと見つめ合いながら、
天を支配した。ついにお互いの同意により
約束の時刻が決まる機会が生じた。
そのためにマルスはウェヌスの最寄りの宮*に、
努めて早く忍び入り、そこで待たねばならない、
ウェヌスがマルスの道筋を歩み、彼に追いつくまで。
自分を愛しいと思うならば急いでくれと彼は祈った。

その時彼はこう言った。「わが心の愛しい君よ、
あなたはここでの私の不幸な実情はよくご存知だ、
たしかに、私があなたに会うまで、
私は危険と恩恵のどこかにあった。
しかしあなたの美しい顔を見ると、
死の恐怖なんて私には苦しみを感じさせ得ない、
なにしろあなたのどんな明るさも私の心の喜びなのだから。」

彼女は、自分が現れるまで独りぼっちで
暮らすその騎士に、大変同情をおぼえたので——
なにしろ、その時彼に助言する人や
彼に歓迎の意を唱える人はいなかったからだが——
その気持ちのためにかわいそうで打ちのめされそうになった。
そのために彼女は彼が二日で進むべきところを
道を早めてほとんど一日で進んだ。*

二人が逢った時、彼らの間に生まれた
大きな喜びは、言葉にあまる。
もはや寝床に赴くだけ、
こうして彼らを喜びと幸せのうちに留まらせておこう。
騎士道の源泉たるこの立派なマルスは、
この美しい花を腕にかき抱くと、
花たるウェヌスは軍神マルスにキスをする。

私が話しているマルスは、
ある一定の時間、宮の中央の部屋に
留まったが、やがて恐怖に襲われるのである、
ポイボスによってだが、大胆にも
宮の門の中に急いで押し入って来たのだ*、
ポイボスは手に松明を持ち、その明るい光線が
ウェヌスの部屋の戸を明るくたたいたのだ。

このみずみずしい女王が横たわる部屋には
大きな白い雄牛たちが描かれていたが、
彼女は大変明るく輝く光によって、

ポイボスが熱で二人を焼くために近づいていることを知った。
この哀れなウェヌスは涙で濡れんばかりに泣き濡れて、
マルスを抱き締めて言った、「ああ悲しい、私、死にます。
この世のものをすべて白日にさらす松明が近づきました」

マルスは急に立ち上がった。愛する人が
ひどく嘆くのを聞くと眠っていられず、
泣くことは彼の性分ではなかったから、
涙の代わりに、彼の両目から
燃え立つ火花が悲しみのためにぱつと飛びちり、
そばに置いてあった自分の鎖帷子をつかんだ。
彼は逃げようとも、身を隠そうとも思わなかった。

でっかくて重い兜を急いでかぶり、
剣を帯び、手に
いつも戦いに使った強い槍をもち、
ほとんど折れちぎれんばかりに振り回した。
彼は地面を大変重そうに歩いた。
もはやウェヌスと一緒に留まることができず、彼女に
ポイボスに見つからないうちに逃げるようにと言った。*

ああ痛ましいマルスよ——ああ——貴方は何が言えるのか。
貴方は殺される危険がある中で
貴方の不安な宮の中に取り残されるのに。
でもそれでは貴方の悔いは二倍となる。
なにしろ貴方の心根を支配した彼女は
貴方の両目の火の奔流（光線）半ばを過ぎているのだから*、
貴方は速くないから、嘆き、泣き叫ぶのももっともだ。

さてウェヌスはポイボスの光を恐れて
キュレニオスの塔*へと孤独の道筋*をたどり逃亡する——
ああ——そこでは助ける人がいない。
どんな人も見つけることも見ることもなかったし、
そこでは力もほんのわずかしかが得られないから。*
そのため身を隠し、身を守るために
門の中の洞穴に逃げ込んだ。

この洞穴*は暗く、地獄のようにくすぶっており、
それは門の中のほんの2度のところにあった。
彼女を暗闇の中に一自然日*の間留まらせておこう。
さて、激怒し狂暴になったマルスについて話そう。
彼は悲しみのために自分の心臓の血を見ただろうに。
彼は彼女に付き合うことができなかったから、
死ぬことには少しも気にならなかったのだ。

彼は暑さと悲しみのために体が大変弱ってきて、
死にそうになり、かろうじて耐えることができた。

彼は2日に1度しか進めない。
それでも、重い鎧を身に着けているにもかかわらず、 130
自分の命の救い手である彼女の後を追う。
彼女が瀕れて行くために、彼は火の中で
自分が燃焼する怒りよりももっと激しい怒りを覚えた。

彼はそつと後から嘆きながら歩くのである。
それは聞くも哀れだった。 135
彼は言った「ああ明るく輝く君よ、ウェヌスよ、ああ悲しい、
私の軌道はなんと広いことか。
ああ、愛するあなたにいつ会えるのだろうか。
今日は4月12日*、嫉妬深いポイボスによる
この不運を私は耐え忍んでいるのだ。」 140

さて神は無邪気なウェヌスのみお助けくださる。
しかし神が望むように、次のことが起こった、
ウェヌスが泣きながら嘆き悲しんでいる間に、
キュレニオスは乗り物^{もの}に乗りながら、
白羊宮から自分の宮を見ることができた、 145
そしてウェヌスに挨拶し、歓待し、
愛しい友として彼女を迎え入れる。

マルスは依然として逆境の中に居る、
彼女が瀕れて行ったことをいつまでも嘆きながら。
私は彼の哀訴の言葉を思い出す。 150
それゆえ、この楽しい朝に
最善を尽くしてそれを語り歌おう。
その後で私は暇乞い^{いとまご}をしよう、
神はすべての人に連れ合いをもつ喜びを与えんことを！

マルスの恨み言

恨み言のルールは理に適うように定められている、 155
もしもある人があわれなほど嘆くのなら、
何のために嘆くのか理由がなければならないと。
そうでなければその人は愚かにも訳もなく嘆くのだろうと
人は判断するかもしれない。ああ、私の場合そうではない！
そのために私の苦しみの根拠と理由を
私の病んだ心でも届けられるように、 160
私は語ろう。救いを得るためではなく、
私の悲しみの根拠を述べるために。

一

ああ、私が初めて造られ、
それぞれの天使^{天使}を支配する神によって
ある確かな目的のためにここへもたらされた時から 165
私はこの上なく卓越している彼女に
真の奉仕^{奉仕}と私の心を永遠に捧げた――

それはなんと高くついたことか！――
初めてお目通りする人は誰であれ、 170
彼女が憤慨してその人を気にもとめなければ、
その人は長く愛の喜びにふけることができない。

私が語るこの話は架空の事柄ではない。
わが君は美と歓びと寛容、
そして高貴の根源と源泉である、 175
豪華な装い――なんと費用がかかることか！――の、
人が親しく^{とど}留まり去らない娯楽の、
愛と楽しみ^{とど}の、温和な慎みの、
あらゆる甘い楽の音の根源と源泉である。
しかも幸運と良い特性をまことによく授かっているのを、 180
世界中に彼女の善がはっきりあらわれている。

たとえ私を喜びもしくは悲しみに^あ充てられるほどの人に、
私は奉仕を尽くすとしても、どんな不思議があろうか、
私の奉仕がその女^{ひと}の力の及ぶところにあるのだから。
だから私は彼女に心を捧げ^{こころを}ることを約束し、 185
彼女の最も忠実な下僕であり騎士であることを、
たとえ死のうとも、全く、私は止めません。
すべての人が知っているように、私は^{つら}諂いません。
なにしろ今日彼女に尽くして死ぬのだから。
好意が示されなければ、もう決してお目にかかりません。 190

二

誰に私の苦悩について嘆こうか。
誰が私を助けることができようか。誰が私の傷を癒せようか。
鷹揚^{おうよう}なわが君に哀訴してみようか。
いや、きっと、彼女は怖れのために、さらに悲しみのために
あれだけの悲しみがあるのだから、思うに、 195
まもなくそれが彼女の殺し屋となるだろう。
しかし彼女が無事であるなら、私のことは大した問題ではない。
ああ、恋人たちは愛のために、絶えず大変多くの
危ない巡り合わせに、耐えなければならないとはなあ！

というのは、恋人たちは新しく鍛えられた金属に 200
劣らないほど、かたく純正なものであったとしても、
多くの場合、恋人たちに悲しみがよく起こるだろうから。
時には彼らの奥方たちは彼らを憐れまないこともあるだろう。
時には嫉妬^{あかし}がそれを知れば、
恋人たちは証として速やかに身を捧げるかもしれない。 205
時には嫉妬深い人びとは悪意ある舌先で
そしることもあろう。ああ、彼らは誰を喜ばせられるのか。
どの恋人も、不実でなければ、気が休まらないのだ。

しかしあちこちにある愛の巡り合わせの

こんな長い説法は何の役に立つだろうか。
私は話を戻して私の苦しみについて語ろう。
私の破滅の核心はこうである、
わが正義の君、わが救いたる、奥方は
おびえておられ、誰に嗅いてよいかお分かりでない。
ああ、いとしの君、ああ、こよなき君よ！
私は他のどんな危害も恐れも感じていなくとも、
君の苦難のゆえに私は気絶して卒倒し*なければならない。

三

高きに在^{いま}す神は何の目的のために
神の下で愛もしくは友情をお作りになられ、
人びとの反対を物ともせず、人びとの恋愛を束縛なさるのか。
それから彼らの喜びは、よくは分からないが、
瞬く間も続かないだろうに、
また死ぬまでまったく喜びを味わえない人もいるのに。
これはどういう意味なのか。この神秘は何なのか。
何のために神は神の僕^{しもべ}たちがこんなに熱心に
欲しがる物を、長く続かないとしても、抑制するのか。

たとえ神は恋人に一人の人を愛させ、
それが不動で永続するようにみせても、
それを大変な不幸にさらしてしまうので、
神の賜物に誰も反応を示さない。
まさに王たるものが自分の創造物に
そんな残酷を行なうとは不思議だ。
こうして、恋愛が破れようが続こうが、
いずれにしても恋愛と関係がある人は
月の形が変わるよりもよく悲しみを味わう。

神は恋人たちに敵意があるように思われる、
そして、どんな時でも分かるように、漁師が
望みを抱いて釣針に餌をつけると、
多くの魚は正気をなくす、
それによって魚を捕まえられる。その時初めて彼は
その欲望を味わうが、それと同時に不幸も味わう。
たとえちよつと釣糸が切れても、彼は痛い目に遭うのだ。
なぜならその釣針でひどく傷つくと、
その報いが永久にあるからだ。

四

テーバイのブローチ*はこんな類いのものだった、
ルビーやインドの宝石がいっぱいついていて、
それを見た人は誰も
まもなく気が変になると思った。
その美しさがひどくその人の心をつかむのだろう。

それを手に入れるまで、自分は死ぬに違いないと思い、
それが物になると、その時彼は当然大変な
恐怖の苦しみを受けるので、それを所有している間いつも、
心配のためにほとんど気が狂いそうになるだろう。

それを所有しなくなると、
その時今度はその人は悲痛と苦痛の二重の心痛を味わう、
みごとに美しい宝石を手放したから。
しかし結局このブローチは
彼の狼狽のもとではなくて、
それを製作した者が、それを持つ者誰かれなく
悲しみを味わうように、それに力（運命）を授けたのだ。
それゆえ悪かったのは製作者であり、
まったく愚かだったのはむやみに欲しがった者である。

そこで成り行きは恋人たちや私次第なのだが、
わが君は大変な美貌の持ち主なので、
たとえ私は彼女の愛顧を得るまで正気でなかったとしても、
彼女は私の不幸のもとではなく、
彼女を製作した御方が、われに栄えあれ、誓って、
彼女の顔に見事な美を刻んだ御方が、
私を切望させ、わが身を死でもって贖わせた
御方がその原因だ——私が死ぬのはその御方のせいにする、
そもそもこんなに高く登ってしまったのは私の愚行のせい。

五

しかし君たち、勇気ある名高い騎士たちに告ぐ、
君たちは私の勢力下に生まれたからだが、
もっとも、私はそれほど偉大な名に値しないけれども、
この学者たちは言う、私が君たちの守護神であると。
それゆえ君たちは私の苦悩について多少の同情を覚える
はずだろうが、それを冗談と取らないでくれ。
君たちのうち最も誇り高い者ですら全く馴らされうのだ、
だから君たちの高貴な心にかけてお願いする、
君たちが私の悲しみを嘆き悲しんでくれることを。

そして貴女がた、誠実で志操堅固であるわが君たちよ、
当然、貴女がたは苦しんでいる人たちに
憐れみの情を抱くことができますはずです。
さて貴女がたは喪服で身を装う理由があります。
尊敬すべき人たる、貴女がたの女皇*様は
孤独*だから、貴女がたは嘆くのは当然です。
さあ貴女がたの清らかな涙を雨のように降らさねばなりません。
ああ、貴女がたの誉れであり貴女がたの女皇様は、
恐怖で死なんばかり、また目的地に到達もできないのです！

またあなたがた恋人たちよ、みんな一緒に、

偽らない慎み深い態度で
 あなたがたをいつも救おうとした彼女のために嘆きなさい*。
 あなたがたをずっと大事になさった彼女のために嘆きなさい。
 美貌と、大らかさと、慇懃な態度を嘆きなさい。
 あなたがたの辛苦を終わらせる彼女のために嘆きなさい。 295
 高潔な振る舞いしか決してしたことがない
 この誉れの鑑^{かがみ}を嘆きなさい。
 だから彼女に多少の親切を示しなさい。

ウェヌスの恨み言

一

悲しみに深く落ち込んでいる時、
 いちばん慰められて楽しくなるのは、
 あのお方の男らしさと立派な態度と、
 誠実なお心と堅固なお心を思い出す時間をもつこと、
 それに勝るものはありません。 5
 生きている限り、私はすべてあのお方のもの。
 誰も私を非難なさるはずがありません。
 どなたもあのお方の高貴な振る舞いを称えておられますから。

あのお方には優しさ、知恵、克己心があり、
 どなたの頭脳をもってしてももはや推し測れません。 10
 品位を高めることを大いに望まれたので、
 あのお方は騎士道の至宝なのです。
 高潔であるゆえに誉れを尊ばれました。
 その上〈自然の女神〉が実に見事に造られたので*、 14
 私はあのお方に永遠にあなたのものとなりましたと誓います。
 どなたもあのお方の気高さを称えておられますから。

あのお方はすべての能力に秀でているにもかかわらず、
 優しいお心はこの上ない慎みから出ており
 私に対する言葉づかいや、行動や、態度にみられ、
 私に仕えることが何よりの本務としておられるので*、 20
 私はまったく安心しております。
 こうしてあのお方は私に仕え、私を敬うことを好まれますので
 私は自分の幸運を当然ありがたく思っております。
 どなたもあのお方の気高さを称えておられますから。

二

さて確かに、〈愛の神〉よ、実にびっくりですね、 25
 あなたの気高い贈物が高いものにつくというのは。
 寝床では眠れず、食卓では食が進まず、
 号泣^{ごうきゅう}は笑声^{しょうせい}に、歌声は嘆きに
 眼は伏し目に、顔は俯^{うつむ}けに、

しばしば色を失い、顔つきを変え、 30
 睡眠中にすすり泣き、舞踏中に夢想するので、
 すべて満足な気持ちの逆になります。

〈嫉妬〉は縄で吊るされたらよい。
 この女は密偵の手段で知りたがり、
 いかに道理にかなったことをしようとも、 35
 悪いことだとしか思わないのです。
 こうして〈愛の神〉が賦与するものは高い買物になる、
 それをこの神はしばしば無秩序に与えるのです。
 悲しみを十分、喜びを少し与えるので、
 すべて満足な気持ちの逆になります。 40

〈愛の神〉の贈物はしばらく心地よい、
 しかし利用するのは非常にやっかいです。
 当てにならない女、奸智^{かんち}の〈嫉妬〉が、
 しばしば面倒を引き起こすから。
 こうして私たちはずっと恐れと苦しみに陥り、 45
 半信半疑のまま悔悟^{かいご}に苦しみ、
 たびたび多くの厳しい災難をこうむります。
 すべて満足な気持ちの逆になります。

三

しかし、無論、〈愛の神〉よ、私はこのように申しません、
 あなたの罠から逃れるつもりですなどと。 50
 なにしろ私はこんなにも長くあなたに仕えたので、
 やめるつもりは決してありませんから。
 たとえ〈嫉妬〉が私を責め苦しめましようとも構いません。
 可能な時にあのお方にお目にかかるだけで十分なのです。
 だから、もちろん、私の最後の日まで、 55
 あのお方を誰よりも愛することに決して後悔致しません。

そして、確かに、〈愛の神〉よ、
 人が代表しうる地位について私が慮^{おもんばか}っている時に、
 あなたは気高い性質のおかずで私に
 今まで地上を歩んだ人のうち最高の人を選ばせて下さった。 60
 ねえ、心よ、存分に愛して、決して愛することをやめないでね、
 そして私はどんな苦痛に際してもいいえと言わないことを
 嫉妬深い人に私の心を試させてみなさい。
 私はあのお方を誰よりも愛することを決して後悔致しません。

心よ、〈愛の神〉があらゆる点で最も立派な人を 65
 そして私の望みに最もふさわしい人を選ぶために
 かくも高度な恩寵をあなたに贈られたことに
 あなたは十分満足しなければなりません。
 本道^{かんだう}も間道^{かんどう}もどちらも、もうこれ以上求めてはなりません、
 私は充足して私の思い通りになっておりますから。 70

こうしてこの哀訴^{コンプレント}の歌、もしくはこの短い歌^{レイト}を終わります。
あのお方を誰よりも愛することに決して後悔致しません。

献辞

王女よ、この哀訴の歌を好意的にお受け取り下さい。

これはあなたのこの上ない慈しみに、

私のささやかな力量に応じて献じた歌なのです。 75

なにしろ私は、精気を鈍らせる老齢のために、

記憶から詩を作る霊力が

ほとんど奪われていますから。

そしてまたフランスで詩を作る人びとの華たるグランソンの

入念で巧みな作品を一語一語たどっていくことは、 80

英語の韻がこんなにも不足していますので、

私には難行苦行の作業なのです。

ココニ ウェヌスノ哀訴 終ワル

ロザモンドへ

バラード

マダム

奥様*、世界地図が丸く伸びる*果てまで、

あなたはあらゆる美の聖堂です、

あなたは栄光の水晶*のごとく光り輝き、

あなたの丸い頬はルビーのようですから。

その上、まことに陽気で快活ですから 5

宴席であなたの踊る姿を見ると、

そのお姿は私の心の傷の膏薬となります、

たとえあなたが私になれなれしくしてくれなくとも。

たとえ一樽*も涙を流して泣こうとも、

私の心はその悲しみに惑わされません、 10

細やかに流れ出るあなたの精妙なお声は

心を喜びと幸せで満たしますから。

私は愛に絡められてまことに淑やかにしか進めないので

苦痛を味わって独り言ちます。

「ロザモンド、私はあなたを思慕するだけで十分です、 15

たとえあなたが私になれなれしくしてくれなくとも」と。

私が愛にどっぷり漬かり、傷ついた、これほど

どのカワカマスもガランティンソース*に漬けられたことはない、

そのために自分でよくこう思います、

私は真正正銘のトリストラム*二世だと。 20

愛を冷ますことも冷やすこともできず、

私はいつも愛の喜びに燃えています。

どうぞご随意に、やがて私はあなたの臣従と知られるでしょう、

たとえあなたが私になれなれしくしてくれなくとも。

イトモヤサシイ—————//—————チョーサー

女としての気品

チョーサーが制作したバラード

あなたの完璧な美しさとあなたの不動の克己心、

あなたの一切の徳とあなたの気高い高貴を、

記憶としてすっかり心にとどめましたので、

あなたに仕えることが私の一切の喜びです。

あなたの女性らしい物腰、あなたの若々しい容貌、 5

そしてあなたの品のよさがすっかり気に入りました。

生きている限り、真の節操を守って、

どんな悲しみに遭っても、決して変わることなく、

恋人にあなたを選ぶことを心に決めたのです。

〔あなたに〕このような敬意を払って、 10

一生涯、渋ることなく、

全力を尽くしてあなたに仕えるつもりですから、

幾分でも私のことをあなたの記憶にとどめて下さい。

今この悲嘆の心は大きな苦しみを被っております。

私はあなたのご命令に対し、全く純朴な心でもって 15

いかに慎み深く意志を固めるか〔ごらん下さい〕、

あなたがこの上なく喜ばれれば、私の苦痛は和らぎます。

あなたに仕える中で私はいかに不安定な気持にいるかも

お考え下さい、ああ、私の運命はこういうものなのだ。

愛顧を、あなたの高貴な行為が 20

私の大きな悲しみの軽減を喜んでなさる時を、

そしてあなたの哀れみを通して私を幾分前進させ、

私の悲哀を十分に緩和して下さい、

そして理性的にお考え下さい、女の気品から、 25

いかなる不従順も見出し得ないところで

過度の害を加えることを望むべきでないことを。

追 連

簇の鑑、歓びの君よ、

美の主権者、婦徳の華よ、

あなたは私の無知を気になさらずに

あなたの優しさによって次のことをお受け下さい、 30

私は記憶としてあなたの完璧な美しさと

あなたの不動の克己心をとどめたと思っていますことを。

お抱え写字生アダムへチョーサーの苦言

写字生アダム*よ、もしも、将来、『ボエース』や
『トロイルス』*を新たに筆写することがあれば、
もっと忠実に私の原稿を筆写してくれなければ、
お前の長い髪の下に乾癬*がきつとできるだろう。 4
私は日に何回もお前のした仕事をやり直さねばならないのだ*。
訂正したり擦ったり削りとりたりしなければならぬのだ*。
すべてお前の怠慢と早合点によるのだよ。

空財布へチョーサーの恨み節

財布よ、他の誰でもない、まさにおまえに訴えるよ
おまえは私の大事な愛人だから。
だが、非常に残念に思っているよ、おまえは尻が軽いから。
私のことを深刻にとってくれないなら、
私は棺に横たわったほうがまだよ。 5
そのためにおまえに慈悲を求めてこう叫ぶよ、
再び重くなれ、そうでないと死ななければならない。

さあ、今日は、夜にならないうちに
おまえの幸せの音色を聞かせてくれ
また輝く太陽のような顔色を見せてくれ 10
比類のない黄金の色を。
おまえは私の生命、私の心の方向舵。
慰めの女王*であり、付き合い上手な女王よ、
再び重くなれ、そうでないと死ななければならない。

さあ、財布よ、おまえは私にとって生命の光であり 15
この世に降りてきた救い主である。
おまえの力でこの町から*私を救い出してくれ、
おまえは私の金庫係になりたくないだろうから。
私は托鉢修道士が頭髮を剃った如くに金を摩った*ものだから。
それでもなお私はおまえの好意を 希 うよ、 20
再び重くなれ、そうでないと死ななければならない。

チョーサーの献辞

ああ、ブルートス建国のアルピオン島*の征服者よ、
あなたは血筋*と議会の決議により
真の王様だ。私はあなた様にこの歌を送ります。
われらの被害を修復することができるあなた様、 25
私の懇願を忘れないで下さい。

写本においてチョーサーのものとされていない詩

不実な女たちに異を唱えて

バラード

マダム
奥方よ、あなたは、初物食いのために
多くの愛の奉仕者たちに情けをかけなくなりました。
私はあなたの誘惑の弱さに愛想が尽きました、お暇 します。
よく分かっています、あなたは生涯、
一か所にとどまって半年も愛し続けることができないのです、5
あなたは常に初物に熱烈夢中だから。
あなたは青衣の代わりに、こうして緑衣ばかり着るのかも*。

鏡はどんな映像も永遠に残すことができないように、
得やすければ、失いやすしなのです。
愛もそうなります、あなたの行為がその証拠です。 10
どんな忠節を尽くしてもあなたの心を抱き留められず。
あらゆる風向きに顔を向ける風見鶏のように、
あなたは振舞う、それは一目瞭然です。
あなたは青衣の代わりに、こうして緑衣ばかり着るのかも*。

あなたは移り気のために、デリラ、クリセイデ*、 15
あるいはキャンダス*よりも列聖化されるに相応しいでしょう。
あなたは安定せずずっと変わっているから。
その欠点を誰もあなたの心から根絶することができません。
あなたは愛人を一人失っても、簡単に二人も得られる*ので、
夏の薄着するだけ*（私の言いたいことがよくお分かりですね）、
あなたは青衣の代わりに、こうして緑衣ばかり着るのかも*。

終ワル

愛の哀訴（コンプライント・ダムール）

ウィンザーで制作された愛の哀訴

私はこの世に生を受けた者のうち、
最も悲しみに沈む男*、
自力で立ち直る術を最も知らない男。
生殺与奪の権をにぎる奥方に
私はこのように必死の哀訴を始めよう、 5
しかし奥方は、とりわけ愛するこの私にはどんな哀れみも
同情の心ももってくれない、忠誠のゆえに自ら滅びるのみ。

貴女が好むように私は為すことも話すこともできないのか。
もちろん今はできない、ああ、ああ悲しい。

貴女の楽しみは私が嘆息をつく時に笑うこと。
そして貴女はこうして私から幸せを遠ざける。
貴女は私を誰も生きて帰ることができない
あの荒涼とした島*に置き去りにした。
愛人よ、私はこれに耐えているのだ。貴女を愛するゆえに。

10

あの人は最高の美女であるから、
この世が続く限り、〈自然の女神〉が製作したか、あるいは
製作するだろうものの、最高の徳と最高の善を持つ人だから、
どうしてあの人は〈慈悲心〉をすっかり置き忘れたのか。 55
確かに、それは〈自然〉の大きな汚点だった。

真実を言えば、次のことはよく分かる。
もしも、貴女の美と善を並べ立てるために
ことができるなら、
恐らく私を悲しませても不思議ではないだろう。
生きとし生けるもののうち、最も値打ちのない者たる私でさえ、
好意を受ける志をいつもこんなに高くおいているのだから。 20
貴女が私に好意を示さなくても、どんな不思議があろうか。

15

だが、誓って、これはあの人の欠点ではなく、
私は〈神〉もしくは〈自然の女神〉を強く責めたい。
あの人は私に哀れみを示さなくとも、
他の人たちにも同じことをするのだから、 60
愛人の戯れを蔑むべきではない。
人が嘆息する時笑うのはあの人の演技なのだ。
だから私はあの人が好むもの喜ぶものすべてに満足している！

ああ、こうして私の生命の幕は閉じた。
私の死、なるほど、私の結末だ。
私は「人生を悲嘆のうちに費やしぬ」と歌っても
差し支えないが、この歌に反駁をうけるかもしれない。 25
憐憫、慈悲、そして深い愛情のゆえに、
私は死相を帯びているけれども、私について申し上げる、
そこで、すべてこれらを求めて私は貴女を深く愛したと。

25

だが、貴女の穏やかな女性としての素晴らしさを見越して、
私は、悲しい気持ちながら、思い切ってこう歎願します、 65
私の苦い悲しみの痛みを言葉で
表現させてくださるようにと。私の哀訴の歌を一度
読み通してほしいのです。私はひどく恐れております、
詩の作術不足のために、貴女が不愉快になることを
何か言葉でここに言い表してしまったのではないかと。 70

こういう風に絶望しながら私は恋に生きます——
いや、絶望しながら私は死にます！ 30
しかし、言われなく私にこの悲しみを与える貴女を
私は私の死ぬ原因である貴女をこうして許しましょうか。
はい、もちろん、私は許します！ 私の愚行はあの人と
全く関係がないのだから、たとえ私を死なせる^{もと}因であろうとも。
私があの人に仕えるのは、彼女が望んだからではないのです。 35

30

私は、今まで嫌われた人の中でも
きつと、最も嫌われている者だろう、
貴女を怒らせることを言うために。
でも、貴女は私が墓の中に横たわるまで、
これ以上の誠実な召使いをもつことはないでしょう。 75
たとえここで貴女に対して不平を述べたとしても、
それをどうかお許しください、私の親愛なる愛するお方よ。

だから私こそが私の悲しみの原因であり、
あの人の忠告をうけずにこれに耐えているから、
一節で全く手短にそれが言える、
私のごとき惨めな男があの人^ののせい^でで死のうとも、
あの人^のの女性としての素晴らしさに責はない。 40
だが常に二つの物が私を亡き者にする。
すなわち、あの人^のの美貌と私の両の眼。

40

私はどうなろうと、生きようと死のうと、
ずっと貴女の慎ましい真の召使い、これからもそうなろう。
貴女は私にとって初めから終わりまで 80
色の明るく輝く星の太陽なのです。
神と私の真実にかけて、私の意図は
貴女を絶えず新鮮に愛すること。
生きようが死のうが、どんな時でもそれを決して後悔しない。

とにかく、あの人は私の病の真の根本原因、
それだけでなく死のそれであるがゆえに、
あの人^が一言お声をかけてくだされば、 45
その一言で私を治すことができるのに。
いやもしかしたら私の苦しみを楽しんでいるのだろうか。
愛の召使いたちが自分のために死ぬのを見て、
楽しむのがきつとあの人^のの習いなのだ。

45

どの鳥たちも伴侶を選ぶ 85
聖ヴァレンティンの日に、この哀訴の歌を、
私は今や完全にあのお方^ののものであり、未来永劫そうである
あのお方に、この悲しい歌とこの哀訴の歌を作る。
今まで私を哀れんでくれたことのないお方だが。
私はあのお方に永遠^{とわ}に仕え、 90
誰よりも愛するだろう、命^{いのち}を絶たされることがあろうとも。

しかし、確かにそうだ、一方で私は不思議に思う、 50
私の判断では、生きとし生けるもののうち、

50

つれない麗人

三重のラウンドル

一

あなたの両の眼に突如として射殺^{いころ}されてしまう*。
その美しさに耐えられない、
その美しさは私の心を鋭く貫き、傷つけるから。

私の心の傷が未だ新しい時、
あなたの言葉によりこの傷が速やかに癒されることがないなら、
あなたの両の [眼に突如として射殺されてしまう。 6
私はその美しさに耐えられない。]

あなたは私の生死を司る女王と、
誠の心にかけて忠実に申し上げる。
私が死ぬば、それは真実だったと分かるから。 10
あなたの両の [眼に突如として射殺されてしまう。
私はその美しさに耐えられない。
その美しさは私の心を鋭く貫き、傷つけるから。]

二

このようにあなたは美しいためにあなたの心から
〈慈悲〉を追い払ってしまった、私はもう嘆いても無駄、 15
あなたの憐憫は〈尊大〉*によって鎖で縛られたから。

こうしてあなたは無実な私を死に到らしめた。
嘘をつく必要がないから、真実を申し上げる。
このようにあなたは美しいために [あなたの心から
〈慈悲〉を追い払ってしまった、私はもう嘆いても無駄。] 20

ああ、〈自然〉はまことに卓越した美をあなたの体に
封じ込めたので、苦しいために誰が命を絶とうとも、
誰も慈悲を得るところまで到れない。
このようにあなたは美しいために [あなたの心から
〈慈悲〉を追い払ってしまった、私はもう嘆いても無駄、 25
あなたの憐憫は〈尊大〉によって鎖で縛られたから。]

三

〈愛〉からこんなに太^{のが}って逃れたから*、
私は〈愛〉の牢獄で瘦せたとは決して思わない。*

今は自由の身だから、〈愛〉なんて全く気にならない。

〈愛〉は応じてきてあれこれ言うかもしれないが、 30
気にしない、私は話したいように話すのだ。

〈愛〉から [こんなに太って逃れたから、
私は〈愛〉の牢獄で瘦せたとは決して思わない。]

〈愛〉は自分の石版から私の名を削除したので、
私も名簿から〈愛〉を永遠にきれいさっぱりと削除した。 35
他にどんな手だても [ないのだから。]

〈愛〉から [こんなに太って逃れたから、
私は〈愛〉の牢獄で瘦せたとは決して思わない。
今は自由の身だから、〈愛〉なんて全く気にならない。]

終ワル

哀訴のバラード

わが心の君よ、たとえ貴女^{おんまへ}の御前に
ずっと仕えていようと、私は私の気持ちを訴え、
苦しい痛み^もの半分も、また被るどんな苦悩も、
決して嘆くことができないだろう。願わくは貴女ご自身に対し、
〈優しさ〉を創造し、〈美〉を刻むことを好み、両方に対し、 5
あなたの居場所に一緒に永久に居残り、常にいるようにと、
お命じになられた神が、私をお救いならんことを。

願わくは神が私のすべての喜びをここへ導き給わんことを、
私はあなたのものであり、私はあなたに献身し真実であるから、
あなたは、私の命、私のよい顔つき^{もと}の因、 10
あなたが私の苦痛を蘇らす時、あなたは死でもある。
わが世の喜びよ、私はあなたにお仕えしお供したい、
わが全天空よ、そしてわが充足よ、
あなたにお仕えすることは私の無上の喜びに定められている。

平身低頭してあなたにお願いする、 15
このささやかな詩を貴重なものとしてお受け取りください。
そして私の真心にかけて、私の奉仕を軽蔑せず、
私の勤めに対しても悪意をもたないでください。
この窮状に耐え切れないほど長すぎないようにもしてください。
わが心の君よ、お願いする、私の哀訴をお聴きください。 20
私はあなたにお仕えしますから、毎年毎年そうしますから

短詩注

- 1、訳書は、Larry D. Benson (gen. ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd. Edition (Based on *The Works of Geoffrey Chaucer* edited by F. N. Robinson) (Boston: Houghton Mifflin, 1987.)を底本にした。
- 2、ここに訳出した作品は押韻詩で書かれているので、原文に従って行に分けて訳した。右端の算用数字は原文の行をあらわし、行数は底本としたリバーサイド・チョーサー版に従っている。できるだけ原文にそって訳したが、英語と日本語の構造上の違いにより、原文の詩文の行とは必ずしも一致していない。
- 3、固有名詞のカタカナ表記は英語表記をとらず、基本的に原語表記をとった。それでも一般に通用していないと思われる場合は通用名を採用した。なお、ギリシャ語とラテン語のカタカナ表記は母音の長短をできるだけ区別しないようにした（例、ソークラテースでなくソクラテス、アエネーアースでなくアエネアス）。
- 4、抽象的観念の擬人化されたものは〈 〉で記した。
- 5、注は文末にまとめて付した。注の左端の数字は行数を見出しの綴字は原文の綴字を示し、イタリックスで表した。本訳では注釈該当箇所の上にアステリックス*を記した。
- 6、注において書名の次にアラビア数字、点、アラビア数字の間をダッシュで記している場合、これらは巻数（章数）、行または行数を表す。たとえば、『変身物語』3. 125は、『変身物語』第3巻125行ということを示し、『騎士の話』860または1033-42は、『騎士の話』860行または1033-42行ということを示す。

『エー・ピー・シー』
(*AnABC*)

- * 4 花の中の花 聖母に対する普通の形容辞。
- * 9 テント *tentetent* 住まいのこと。
- * 39 その日 *that day* 神がこの世を裁く審判の日のことである。
- * 56 永劫の悪臭場所 *stink eterne* 中世の思想では、地獄の概念の一つとして、地獄は悪臭場所であると考えられていた。
- * 83 貴方がたお二人 マリアとキリストのこと。
- * 88 われらみんなの敵 悪魔のこと。
- * 84 高価に贖われたもの 魂のことなので、この後に「(魂)」を挿入した。
- * 85 矢来 *listes* (= lists) 本来、中世騎士が領主や貴族たちが見守る前で試合をする「馬上槍試合場、あるいはそれを囲む柵」のことだが、日本的に「矢来」と訳した。ここは法廷の論争で戦わされる「論争の場」のことである。「私」は敵に馬上槍試合場で闘いを挑んでいることをイメージしている。
- * 85 打ち負かしてやった *convict* (= convicted) をこう訳した。法廷で「有罪を宣告した」の意味だが。
- * 115 ガブリエル *Gabrielles* Gabriel 大天使。処女マリアにキリストの受胎を告げた。
- * 163 ロングウス *Longius* Longius キリストの脇腹を槍で突き刺したと思われる盲目の百人隊長の隊長。
- * 169 イサク *Ysaac* Isaac イサクの犠牲（『創世記』第22章）はキリストの十字架上の死を暗示すると思われた。イサクは旧約聖書中のイスラエルの族長の一人で、『創世記』によれば、アブラハムの子で、神に試されて進んで犠牲として捧げられようとしたり、妻レベカのたくらみによって長子エサウの代わりに弟のヤコブを祝福したりした。
- * 177 ザカリヤ *Zacharie* Zechariah 聖書の預言者。バビロン捕囚からの最初の帰還者に、メシアの時代におけるイスラエルの再興を予言した。そして神殿の再建を完成させた。
- * 178 罪深い魂を洗い清める開かれた泉 「ザカリヤ書」13:1 参照。
- * 181 アダムの子孫 人類のこと。

『〈憐憫〉への哀訴』
(*The Complaint unto Pity*)

- * 15 棺上の蠟燭立て *herse* つまり *hearse* 「棺の上に置いて蠟燭を並べ立てる枠」のこと。遺体は正装安置されている。
- * 27 類似の表現については『公爵夫人の書』587 参照。

- * 38 〈恵み〉 *Bounte* Bounty 〈恵み〉はなぜ武装しなければならないのか分らない。
- * タイトル 哀訴の嘆願状 *The Bill of Complaint* は、法律用語である。法廷あるいは他の当局に差し出した正式の訴状である。
- * 60 文脈上から「[そう呼びますが]」を挿入した。
- * 76 これら二つを欠くならば 「(真実) と (美) が〈憐憫〉に欠くならば」の意。
- * 92 〈復讐の女神たち〉の女王 〈復讐〉の女神たちとはアレクトー、テイシポネー、メガイラという三姉妹のこと。彼女たちは自然の掟に反した者を追及する。彼女たちの頭髮は蛇である。〈憐憫〉はその女神たちをコントロールすることができる唯一の人物であった。
- * 99-104 『鳥の議會』90-91 比較参照。「なぜなら、私は望まなかったものをもてたが、／望んだあのものをもてなかったからだ。」(笹本訳)、また上掲『かの君への哀訴』43-45 参照。

『かの君への哀訴』
(*A Complaint to his Lady*)

- * 37 わが甘美な敵 *my swete fo* 撞着語法 *oxymoron* を使っている。さらに「私の最愛の敵」58 参照。
- * 43-45 『〈憐憫〉への哀訴』90-104 参照。『鳥の議會』90-91 参照。
- * 65 僕たち *servantes* servants 求愛者たちのこと。宮廷風恋愛では恋人が愛人に僕(しもべ)の振る舞いをすることは、重要な徳目の一つだった。
- * 76 [私ほど] 76-77 行の文は比較の形であり、そこに「[私ほど]」が暗に含まれていると思うので補った。

『マルス (火星) の哀訴』
(*The Complaint of Mars*)

- * タイトル マルス (火星) *Mars* マルス (マース) は、ローマ神話ではユーピテル (ジュピター) とユノー (ジュノー) の子。軍神である。戦いの神であることから、赤い、血の色が連想され、赤い色をしている火星にその名がつけられた。したがって火星は占星術ではマルスの性質をもつ。ローマ神話ではマルスはウェヌスと恋に落ちた。プトレマイオスの宇宙体系では、地球から数えて第五天球、土星から地球に向かって第三天球に位置する惑星。以下、火星のこともマルスと表記する。なお、チョーサー時代の宇宙観は天動説のそれである。
- * 1 東雲 *the morowe gray* gray, grei は MED adj. & n. 1. (b) によると of morning light: dim, gray, early と解しており、morowe は morning の意なので、思い切ってこう訳した。
- * 2 ウェヌス *Venus* ここは明けの明星としての金星をあらわす。ウェヌス (ビーナス) はローマ神話では春・花園・豊穡の女神だったが、後にギリシャ神話の愛・美の女神アフロディテ *Aphrodite* と同一視された。金星は明るく美しく輝く星であることからウェヌスの名がつけられた。また明けの明星、宵の明星でもある。したがって金星は占星術ではウェヌスの性質をもつ。プトレマイオスの宇宙体系では、地球から数えて第三天球、土星から地球に向かって第五天球に位置する惑星。以下、金星のこともウェヌスと表記する。
- * 8 悲涙 *teres blewe* blewe (= livid). *blewe* または *bleu* は、MED を参照すると、adj. 1. (e) の項に比喩的に “sad, sorrowful” を意味するとしてここを例文に挙げているのでこう訳した。
- * 9 聖ヨハネ 使徒ヨハネを指すのかバプティスマのヨハネを指すのか意見の分かれるところである。
- * 13 鳥 *foul fowl* 今では「家禽」あるいは「鶏」の意だが、中英語では *bird* をあらわす常用語だった。古英語 *fugol* から来ている。
- * 23 鳥の流儀 *bridles wise* bird's fashion 現代英語の *bird* は *brid* の音位転換 *metathesis* した語である。中英語では *r* の音位転換がしばしばあらわれた。例えば、*r* が音位転換して *gers* が *grass* に、*fersch* が *fresh* に、*thrid* が *third* になった。なお、*bird* は「若い鳥」*young bird* を含意する。
- * 27 ポイボス (太陽) *Phebus* Phoebus ポイボス (フィーバス) は、太陽としてのアポロのこと。ポイボスは、ウルカヌスに、彼の妻ウェヌスがマルスと闇を共にしているのを見て、ウルカヌスに嫉妬を起こさせた。プトレマイオスの宇宙体系では太陽も惑星である。金星と火星の間

にある第四天球である。

・28 第三天の王 マルス（火星）は、上注のように、惑星で最も外の天球サトゥルヌス（サターン）（土星）から内側に数えて第三の天球にいる。

・29 天の回転運動 火星を金星と合をもらす軌道の運動。金星は通常火星の有害な影響を和らげる。物語詩では火星と金星は牡牛座の合の中に進んで行く。金星は火星よりはやく大空を通り抜けていくから、金星はどんどん進み、太陽が近づくとき火星を後に残していかねばならないのである。

・31 金星（ウェヌス）は慈悲深い、善意に満ちた惑星（吉星）であり、火星（マルス）は悪意に満ちた惑星（凶星）である。金星の善意のこもった影響は火星の邪悪な影響を和らげる。なお、二人の恋愛関係を理解しやすいように「愛の僕として」という語を訳者が挿入した。

・42 表情 *chere look* 占星術の星相のこと。

・53 ウェヌスの最寄りの宮 金星の最寄りの宮つまり居所は、すぐ次に来る金牛宮である。火星はそこで待つ。金星はより速いスピードで進み、火星に追いついてくる。火星は金星より先に行っているが、大空をゆっくり動くからある。

・69-70 火星は2年で軌道をまる一周する（実際には687日）と一般に言われる。こうして火星は1日におよそ2分の1度動き、火星はほとんどまる1度動く。

・81-82 太陽は（チョーサーの時代の4月12日に）牡牛座（金牛宮）に入る。1385年4月12日までにウェヌス（金星）はすでに牡牛座を去り、双子座（双子宮）の中へ3°入っていた。

・104-105 太陽の軌道は火星と金星の間にあり、その結果、太陽の運動は金星より遅いが、火星より速いので、太陽は火星に追いつくことができるが、金星に追いつけない。

・111 貴方の両目の火の奔流（光線）半ば 火星の影響範囲の半分のこと。火星の両側4度に広がる。合は終わりつつあるということの意味し、金星は立ち去りつつあることを意味する。上述95-96行参照。

・113 キュレニオスの塔 *Cilenios tour* メルクリウスの星座、つまり双子座、双子宮である。キュレニオス *Cyllenius* はローマ神話のメルクリウスの別名。キュレニオスはアルカディアのキュレネ山 *Mt.Cyllene* で生まれた（『アエネイス』8:139）。メルクリウスはギリシャ神話のヘルメス *Hermes* の異名。メルクリウスは神々の使いの神で、商業・盗賊・雄弁・科学の神。「塔」*tour* は黄道帯の宮（宿）のこと。金星は金牛宮から次の宮の双子宮に入る。

・114 孤独の道筋 火星は金牛宮に残され、双子宮にはそのとき他の惑星はいなかった。

・117 力もほんのわずかしが得られないから 惑星はそれ自身の最高勢位 *exaltation* と呼ばれる宮で最大の影響を及ぼした。その最小の影響しか及ぼせないのは最小勢位 *depression* と呼ばれた。金星の最高勢位は双鱼宮にあり、最小勢位は処女宮にあった。金星は今双子宮にあったので、金星は最高勢位から最小勢位への中途にあった。そこで彼女の影響力は小さく弱っていた。

・122 一自然日 24時間のこと。ウェヌス（金星）が洞穴に一自然日の間つまり24時間居残るという考え方は、金星は1日に1度動くという考え方に基づいているように思われる。

・139 4月12日 マルスが（1385年4月12日には21°で）居残る牡牛座（金牛宮）の中に、太陽が入る日。

・144 乗り物 *cheval* 中世では惑星は一般に馬か鳥に引かれた戦車に乗っているような挿絵で描かれた。

・164 天使 *intelligence* *intelligence* はそれぞれの天球を治める天使 *angel* を意味する。

・217 気絶して卒倒し *swowne and swelte* チョーサーは類似語を繰り返し使って頭韻し、畳語のようにして意味を強めている。なお、恋人のこのような振舞いは宮廷風恋愛の常套手段だった。

・245 テーバイのブローチ ウルカヌスによって作られたブローチ。ウルカヌス（バシカン）はマルスとウェヌスに嫉妬して、彼らの娘ヘルモニアのためにこれを作ってやったが、このブローチはむやみにほしがするすべての人に不幸をもたらしたのである。この物語はスタティウス『テーバイ物語』(*Thebaid*) 2.265-305に語られている。テーバイは古代ギリシャのボイオティア地方の都市。

・259 それを製作した者 火と鍛冶の神ウルカヌス（ウェヌスの夫）のこと。

・285 女皇 ウェヌスのこと。ウェヌスは、マルスが騎士たちを支配す

るように、奥方たちを支配する。

・286 孤独 ウェヌス（金星）は占星術的にいえば星回りの悪い位置にある。

・290 原文では、このスタンザ（291-298行）には *Compleyneth* で始まる句（phrase）が、291行、293行、294行、295行、そして296行にあり、チョーサーは修辭法の重言法（*conduplicatio*）を使って詩をつくっている。こうして彼は詠嘆の詩行を連ねる方法を用いてこの詩を終えているのだ。

『ウェヌスの哀訴』 (*The Complaint of Venus*)

・14 美を（自然の女神）の最高傑作としてみる周知の考え方の表現は、『公爵夫人の書』908-11、「医者話」11-13「ほら、わたくし、自然の女神は、好む時には、生き物をこのように立派に作り、彩ることができるのよ、だれがわたくしの真似ができて？」（笹本訳）にもみられる。この考えはフランスの詩にはない。

・20 『女の高貴』12「全力を尽くしてあなたに仕えるつもりですから」（笹本訳）参照。

・50 異(*voure*)*las* フランス語 *amoureux las* のこと。つまり「恋の異」「魅惑された異」のこと。「騎士の話」の *his laas* (1817) は「恋の異」と訳し、*hir las* (1951) は「ウェヌスの異」と訳した。

・71 この哀訴の歌、もしくはこの短い歌 チョーサーはこれらの用語を大ざっぱに使用している。

・79 グランソン *Oton de Grandson* (1340頃—1397年)。フランスの詩人。サヴォワの貴族で、騎士道の有名人でもあった。故国よりもイングランドで生涯の大部分を過ごした。イングランド王に忠誠を誓い、1374年にジョン・オヴ・ゴントの宮室に入り、そこでチョーサーに出会ったことは間違いないであろう。サヴォワの領地はサヴォワの伯爵に対する陰謀に関係したとして、1393年に没収された。1397年告訴の無罪を証明するために行なった決闘で死んだ。

『ロザモンドへ』 (*To Rosemounde*)

・1 奥様 *Madame* ロビンズはフランス国王の長女パロワのイザベルを暗示するというが、*madame* はバラッドのよくある呼び掛けの形式である。『不実な女たちに異を唱えて』1参照。

・2 世界地図が丸く伸びる 中世の地図はたいがい丸かった。

・3-4 水晶、ルビー 両方とも聖堂や遺物に使用されるのに一般的だな宝石だった。

・9 一樽 *a tyne* *tyne* は *barrel* (樽) のこと。*barrel* はバケツ4、5杯分の液体がいっぱい樽の大きさ。

・18 ガランティンソース *galauntyne* これは冷たいゼリー状にしたソース。褐色のパンや、酢、塩、胡椒から作られた漬け汁ソースか。魚や鳥料理用に使う。*sause of galantine* 『昔の時代』16参照。

・20 トリスタム *Tristam* トリスタン *Tristan* は異綴（いてつ）。アーサー王の円卓の騎士団の一人。コーンウォール王マークの妃イゾルデ *Iseult* との恋は多くの中世ロマンスの題材になった。中世ロマンスのイゾルデの理想化された恋人。

お抱え写字生アダムへチョーサーの苦言 (*Chaucers Wordes unto Adam, His Owne Scriveyn*)

この詩はShirleyの写本R.3.20のタイトルからチョーサーの作とされているものである。主な関心は写字生アダムは誰かということであったが、近年明らかにされた。内容のほとんどは作者の思い通りに筆写してくれない写字生に対して発した怒りの忠告である。この詩が制作された年代は、『ボエース』と『トロイルスとクリセイデ』（1380年代の中頃、遅くとも1387年）のことが述べられていることから、この二作品が完成した直後のある時期に書かれた可能性もないわけではないが、1380年代後半と考えられる。詩形は『トロイルスとクリセイデ』と同じくライム・ロイヤル・スタンザで書かれている。

・1 写字生アダム *Adam Adam scriveyn* チョーサー専属の写字生 *his owne scriveyn* アダムの正体として、*Adam Stedeman* あるいは *Adam*

Acton あるいは Adam Pynkhurst の名が挙がっていた。しかし Linne Mooney 教授の長年の調査の結果、アダムは、フリーで請負仕事を忙しなくこなす、ロンドンのプロ写字業者 Adam Pynkhurst であることが判明した。そしてこのアダムは、チョーサーの『カンタベリー物語』の最も古くて、しかも信用されている二つの写本、(1410 年頃以前の) Hengwrt MS とついで Ellesmere MS を書き写した当人であることも分かった。

『ボエース』 ボエティウス『哲学の慰め』のチョーサー訳の題名。

* 2 『トロイルス』 チョーサーの作品『トロイルスとクリセイデ』のこと。そして『トロイルスとクリセイデ』5. 1793-98 にも写字生の筆写に対し、同じような心配をしてくる詠っている。「わが国語は音や綴りにおいて、／著しい多様性があるために、／誰もが汝(書物)を写し誤らないようにと神に祈る、／また韻律も言語力不足のせいで誤らないようにと祈る。／汝はどこで読まれようと歌われようと、／理解されるようにと神に切に願う！」

『空財布ヘチョーサーの恨み節』 (*The Complaint of Chaucer to his Purse*)

* 4 原文 scalles は乾癬(かんせん)らしい。「乾癬」は、紅斑の上に雲母状の銀白色の葉状鱗屑(ようじょうりんせつ)を生ずる慢性皮膚病。特に、肘・膝・頭部などにでき、落屑(らくせつ)が著しい。

* 5 写字生が写本の転写を終えると、校合を専門にする人がいたが、チョーサーは写字生の誤写を、みずから校正者として訂正していたようである。

* 6 羊皮紙に書かれたものを訂正するには、古いインクを削り、それから再び表面をこすって滑らかにした。写字生を描いた挿し絵には片手に鷲ペンを持ち、もう一方の手に削る道具(ペンナイフ)をもつ写字生の姿がみられる。ちなみにこのペンナイフは誤写部分を削るためだけでなく、鷲ペンの先を削ったり、羊皮紙を押さえるための役目もした。

* 13 慰めの女王 *Queene of comfort* この語は『エー・ビー・シー』77 行にみられる。

* 17 この町から スキートによると「この町」とはロンドンのことであって、この行はロンドンからもっと物価の安価の土地へ退く手助けをしてほしいという願望を表しているのだとする。フィッシャーは、史実から推測して「この町」という意味はグリニッチを示し、1399 年 12 月 24 日のヘンリー 4 世からの下賜金によって、チョーサーは債権者から隠れることができるウェストミンスター寺院の近くに家を借りることができるようになったとする。しかし、この詩に関してもいえば、哀訴の部分にはリチャード 2 世の時代にすでに書かれていたものであり、後に献辞を加えてヘンリー 4 世に捧げたものであるとされているので、「この町」はどこを指すのか明確ではない。ドナルドソンは、原文 out of this toune の toune (= town) を tonne (= tone, tune) と読み、

“predicament” (苦境) を意味するのではないかと解釈する。文脈からみるとこの意味にとるほうがよい。

* 19 原文は *I am shave as nye as any frere* である。“I am bare of money as a friar's tonsure is of hair:” の意味なので、訳の出来不出来は別にして、洒落めいて訳した。

* 22 ブルーツ建国のアルビオン島 *Brutes Albyon*、ブルーツは、アイネアースの曾孫と伝えられ、ブリテン人の始祖と称せられるイギリス伝説時代の王。アルビオン島はブリテン島の古い名称。通例イングランドに限定する。英語の Albion はラテン語の albus (白) からきた語で、ドーヴァー海峡に面するイギリス側海岸の白亜質の絶壁が白く望見されたことによりブリテンの代名詞になった。「征服者」とは、ヘンリー 4 世をさす。1399 年 2 月ジョン・オブ・ゴント(エドワード三世の第四子)が死ぬと、国王リチャード 2 世(エドワード三世の長子であるエドワード黒太子の長子)はゴントの長子ヘンリー(後のヘンリー 4 世)に渡すべきはずだった領地を取り上げた。なぜならヘンリーはその前年にリチャード 2 世によってフランスに追放されていたからである。ヘンリーは急いで帰国し、貴族の大部分から支持を得て、王を捕らえ、ロンドン塔に幽閉した。

* 23 血筋 ヘンリー(ヘンリー 4 世)はエドワード三世の第四子であるジョン・オブ・ゴントの長子で、ランカスター王家の創始者である。「議会の決議」、原文は free eleccion、議会はリチャードの廃位を宣言し、ヘンリーの即位を認めたからこう訳した。議会がヘンリーの即位を認めたのは、1399 年 9 月 30 日のことである。

* 25 あなた様 ヘンリー 4 世を指すといわれる。この行はチョーサーの献辞。

『不実な女たちに異を唱えて』 (*Against Wimen Unconstant*)

* 7, 14, 21 青衣、緑衣 青は貞節を、緑は不貞を象徴する色である。

* 15 デリラ *Dalyda*、クリセイデ *Creseyde* デリラ Delilah はサムソンの愛人で、欺いてサムソンをペリシテ人に売り渡した。「士師記」16 参照。クリセイデ Criseyde はトロイルスの不実な恋人。

* 16 キャンダス *Candace* 自分の思いのままにするためにアレクサンドロスをだましたエチオピアの女王。アレクサンダーロマンスもののエチオピアの女王である。

* 19 この語句は次の諺に類似する。It is good to have two strings to one's bow. (弓に弦を二本用意する(二の矢の用意がある)ことはよいことだ)。

* 20 夏の薄着だけ どうやら移り気あるいはふしだらのほめめかしがあるらしい。

『愛の哀訴』 (*Complaynt D'Amours*)

* 2 最も悲しみに沈む男 *the sorwefulleste man* 類似の表現、「一番悲惨な男」the wofulleste wyght『トロイルスとクリセイデ』4. 516。

* 13 あの荒涼とした島 ロビンソンは、その島はテセウスがアリアドネーを捨てたナクソス島であるという。だが確認は得られていない。

『つれない麗人』 (*Merciles Beaute*)

* 1 これは当時の恋愛詩ではおなじみのイメージ。「騎士の話」1096 と 1077-97 参照。

* 16 〈尊大〉 Daunger を Disdain (尊大) と訳した。チョーサー訳『薔薇物語』3018 行参照。

* 27 『スコーガン』31 参照。恋人が痩せる表現については、チョーサー訳『薔薇物語』2684-86 参照。

* 28 牢獄 恋愛詩の常套語。『ブクトンヘチョーサーの献辞』14 参照。

(付記) 上記に訳出した小詩の愛の表現には、中世ヨーロッパの愛の作法—宮廷風恋愛—が根本に流れているので、それを説明する。

この愛の作法は古代ローマの詩人オウィディウスの『愛の技法』*Ars Amatoria* に始まるといわれる。それは意中の婦人に対して絶対服従で、万難を排して誠実を貫くといった、オウィディウスが皮肉をこめて推奨した愛の規範である。それが 11 世紀末のヨーロッパ中世の宮廷を遍歴する吟遊詩人の吟唱の中に突如あらわれる。この規定が中世の宮廷において定められ、中世文学の主題に選ばれたのである。

この恋愛の約束ごとは、特にアンドレレ拝堂付き司祭アンドレア・カペラヌス *Andreas Capellanus* によって、13 世紀初頭に書かれたと思われる『誠実な愛し方の技術』*De Arte Homeste Amandi* において集大成され、恋人たちの態度や彼らの欲望に対する礼儀正しい振舞いの手引きとして、一般に受け入れられたのである。

公に受け入れられた道徳的な規準以外の恋愛関係に関しては、

歴史のあらゆる時代に存在したけれども、中世の上流階級の間では結婚を決定するのにいろいろな条件があった。その条件の中に、最も関係する相手の気持ちはほとんど考慮されなかったために、特に結婚外の密通を促した。宮廷風恋愛はそのような密通に、何やら立派な行動の雰囲気を与えたのである。

カペラヌスの定義によれば、恋人の求愛を拒絶するための女性側の言い訳として、結婚していることは抗弁にならなかった。実際、封建時代の中世では政略結婚が多かったために、夫と妻の間の愛はあり得ないと考えられていたので、結婚することが恋人たちの気持ちのめざす目標ではなかった。女性が未婚であってもそうだった。そういうわけで未亡人は恋人が注目する対象として、既婚の女性と同様に望ましいものであった。その教義は真の恋人はどのように振舞うべきか、どのように感情表現すべきかについて、いろいろ規定している。

恋人はただ一人の女性のためにのみ、真の愛を経験し、最初、遠くで彼女を崇め、決して受け入れられないのではないかと心配し、あるいは自分は恋人にふさわしくないのではないかと恐

れ、自分の愛を打ち明けるのをためらい、(信頼できる友がいるとしても) 秘密に苦しみ、自分の愛する人の世評を守るために、大変内密にして事を運ぶのである。恋人は、彼女の面前では身震いし青くなり、不眠に悩み、食欲不振などになって苦しむ。他方、意中の人はなかなか関心を示してくれないように思われる。あるいはそういう様子をするであろう。もしかしたら気まぐれであるかもしれない。あるいは一見薄情な人のように見えるかもしれない。しかし結局彼女は快く好意を示すであろう。恋人の絶対的な忠誠がこの法のきわめて重要な徳目であった。

これらの基本的内容や条件は多くのところで、ロマンティック・ラブの特徴を備えているが、それと根本的に違うところは、カペラヌスにとって、まず、愛の目的は、教会の儀式(正式な結婚の手続き)によらずに愛の実際の結実を考えているということである。宮廷風恋愛の春は12世紀だった。その秋は13世紀だった。チョーサーの時代までにそれは単なる文学的な伝統様式にすぎなくなってしまっていた。

参考文献

- Baugh, A. C., ed. *Chaucer's Major Poetry*. New Jersey: Prentice-Hall, 1963.
- Benson, Larry D., ed. *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- Brewer, Derek. *Chaucer and His World*. London: Eyre Methuen, 1978.
- [デレク・ブルーアー著、海老久人・朝倉文市訳『チョーサーの世界—詩人と歩く中世』京都：八坂書房、2010.]
- Coghill, Nevill. *Geoffrey Chaucer*. London: Longmans, Green & Co., 1956.
- [ネヴィル・コグヒル著、安東伸介訳『チョーサー』(英文学ハンドブック) 研究社、1971.]
- Ellis, Steve. ed. *Chaucer: An Oxford Guide*. Oxford: OUP, 2005.
- Fisher, J. H., ed. *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977.
- Gray, Douglas. ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford: OUP, 2003.
- 原野昇訳、ピエール＝イヴ・パデル著『フランス中世の文学生活』東京：白水社、1993.
- 樋口勝彦訳、オウィディウス『愛の技法』(平凡社ライブラリー) 東京：平凡社、1995.
- 池上忠弘著『14世紀のイギリス文学—歴史と文学の世界—』東京：中央大学人文研究所、2011.
- 地村彰之著『チョーサーの英語の世界』広島：溪水社、2011.
- Kurath, Hans. ed. Kuhn, Sherman M. assoc. ed. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: Michigan UP, 1956-2001.
- 河崎征俊著『チョーサー文学の世界—〈遊戯〉とそのトポグラフィ—』東京：南雲堂、1995.
- 河崎征俊著『チョーサーの詩学—中世ヨーロッパの〈伝統〉とその〈創造〉』東京：開文堂出版、2008.
- 沓掛良彦訳、オウィディウス『恋愛指南』—アールス・アマトリア (岩波文庫) 東京：岩波書店、2008.
- Lewis, C. S. *The Allegory of Love*. London, Oxford and New York: OUP, 1969.
- [C・S・ルーイス著、玉泉八州男訳『愛とアレゴリー』東京：筑摩書房、1972.]
- 正木喬訳、ラフィット＝ウサ、J. 『恋愛評定』(文庫クセジュ) 東京：白水社、1957
- 榊井迪夫訳、チョーサー『完訳カンタベリー物語』(岩波文庫 上・中・下) 東京：岩波書店、1995.
- 榊井迪夫著『チョーサーの世界』(岩波新書 966) 東京：岩波書店、1976.
- Minis, A. J., ed. *Oxford Guides to Chaucer—The Shorter Poems*. Oxford: Clarendon, 1995.
- 野島秀勝訳、アンドレアス・カペラヌス著、J・J・バリ編『宮廷風恋愛の技術』東京：法政大学出版局、1990.
- 斎藤勇著『カンタベリー物語—中世人の滑稽・卑俗・悔悛』(中公新書 749) 東京：中央公論社、1984.
- 斎藤俊一訳『ミディーヴァル・メドレー—中世英詩翻訳』東京：荒竹出版、1991.
- 笹本長敬訳、チョーサー『チョーサー 初期夢物語詩と教訓詩』大阪：大阪教育図書、1998.
- 笹本長敬訳、チョーサー『カンタベリー物語』東京：英宝社、2002.

笹本長敬訳、チョーサー『トロイルスとクリセイデ』東京：英宝社、2012.

佐藤勉著『チョーサーの恋愛詩—試訳と解釈—』(高文堂新書) 東京：高文堂出版社、1976.

佐藤勉訳著『チョーサー小詩の世界』東京：高文堂出版社、1985. (『チョーサーの恋愛詩—試訳と解釈—』の増補改訂版)

繁尾久著『中世英文学点描』東京：伸光社、1982.

ABSTRACT

A Japanese Translation of Geoffrey Chaucer's *The Short Poems*

Akiyuki Jimura and Hisayuki Sasamoto*

Department of Secondary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

*Formerly, Professor of Osaka University of Commerce

(Received October 21, 2019; accepted December 9, 2019)

This article consists of three parts: (1) an introduction, (2) a Japanese translation of Geoffrey Chaucer's *The Short Poems* and (3) the explanatory notes and the textual notes of *The Short Poems*. Our translation is based upon Larry D. Benson's text (1987). The two edited texts of A. C. Baugh (1963) and J. H. Fisher (1977) are referred to when necessary. In the translation of Proper Nouns, *katakana* does not correspond to English pronunciation, but mostly the original language. We have not distinguished the long and short vowels of Greek and Latin, when using *katakana*. Personification of abstract ideas are shown in angle brackets 〈 〉.

Chaucer's short poem "Chaucers wordes unto Adam, his owne crieyn" is often quoted in a number of papers and books. This poem was written about the date when his representative work *The Canterbury Tales* began to be written in the late 1380s, judging from the references of *Boece* and *Troilus and Criseyde* in this poem. This short poem is composed in rhyme royal (ababbcc), the rhyme structure which is made use of in *Troilus and Criseyde* and some tales of *The Canterbury Tales* such as "Prioress's Tale."

Adam scriveyn, if ever it thee bifalle
Boece or Troylus for to wryten newe,
Under thy long lokkes thou most have the scalle,
But after my making thow wryte more trewe;
So ofte adaye I mot thy werk renewe,
It to correcte and eke to rubbe scrape,
And al is thorough thy negligence and rape.

We do not know how much Chaucer was serious or joking as usual, when reading and rereading this poem. However, Chaucer had elaborated his writings more often than not, and he revised *Prologue, Version F* and made *Prologue, Version G* in *The Legend of Good Women* around 1386. These facts made us consider that Chaucer's complaint for his scribe Adam had been true enough. As is indicated in our notes, the fact that the real image of Adam was recently discovered may prove that the relationship between Chaucer and Adam existed in the late fourteenth century in London.

This article provides a Japanese translation of Chaucer's short poems. It should be noted that the limitation of pages was obliged to omit some of the poems translated earlier in Sasamoto's *Chaucer Shoki Yumemonogatari Shi to Kyokun Shi* (1998).